

奄美ことばの言語景観

ダニエル・ロング

一 問題の所在

ソシユールの時代から、方言学のみならず、言語学者一般は話ことばを研究の主な対象としてきた。一方、言語生活研究では、書き言葉を用いた言語行動もテーマの一つとして位置づけられており、スピーチコミュニティの構成員の社会言語学的日常において、文字言語が大きな役割を果たしているのは言うまでもないことである。生活環境を作り上げている一つの要素として「目に見えることば」も無視できない。この主張は近年、注目されつつある「言語景観論」の出発点である。日本語を対象とした「言語景観論」には Inoue (2005)、Backhaus (2007) などの研究がある。一方、フィールドワークに基づいた方言学の本では、以前からカタチのない「ことば」を、より現実の物にしているのは「方言看板」の写真である(柴田一九八八、杉村一九九六など、木部一九九七など、郡一九九七)。地元人と観光客との間の間接的コミュニケーション行動として、看板や標識といった不特定多数の受け手(読み手)のために作られた文字言語の実例をとりあげ、その中に使われる地域言語の使用実態やその社会言語学的、社会心理学的意義について考察する。

二 景観とその「意義」

オーストラリアのブリズベイン市の街を歩いているとき、角を曲がって突然図1の光景が目に入ったとする。この中国風の門を見ただけで「あつ、チャイナタウンに来たんだ」と思うだろう。こうした人工的な光景(または山などの自然な光景)を見ることによって、人は自分の環境を意識する。まわりにある光景が変われば、人間の環境に対する意識も変わる。これが「景観」を研究する意義である。門などの建造物を見るときと同じように、言語的要素を意識することによって



図1 オーストラリアのブリズベイン市のチャイナタウンの景観



図2 チャイナタウンの中国語表示



図3 チャイナタウンの漢字による道路標示

人は自分の環境を意識する。図2と図3は同じブリズベイン市の標識で、トイレや地下鉄のホーム、道路の名前が英語と漢字で表示されている。これを見ることによって、「そうか、ここチャイナタウンなんだ」と人は認識を改める。このように、人が環境を意識するときに影響を与える言語的要素のことを「言語景観」と言う。「言語景観」(linguascap)は「景観」(landscape)の言語と関係する部分である。



図4 空港で見るノーフォーク語の看板

Welkam tu Norfolk Ailen

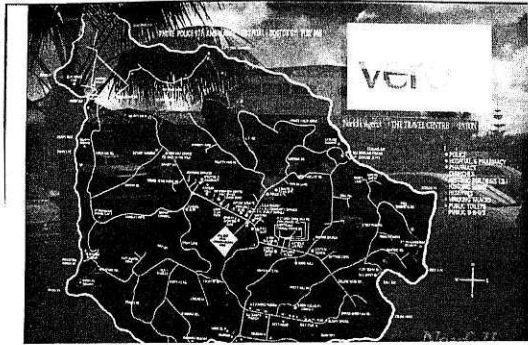


図5 町の中心で見るノーフォーク語の看板

なよ！ここはオーストリアじゃないよ」と言えよう。(ちなみに、この「Welkam tu Norfolk Ailen / Welcome to Norfolk Island」だけを見れば、地域言語であるノーフォーク語は標準英語とさほど変わらないという印象を受けるだろうが、たまたまこの表現は似ているのである。表現によっては標準英語とかなり違うところもある。例えば、二人称代名詞(英語なら *we* や *us*) はノーフォーク語では *ailean* 「私たち」になっている。ノーフォーク語はクレオール化した英語とはいえ、標準英語との相互理解が不可能なぐらい差が大きい)。

図5に同じ語句がノーフォーク語で書かれているが、今度は町の中心にある島の案内図である。ここは図4の看板

と違って標準英語訳がない。その理由はこの表現の場合二つが似ていて不要だから、と考えられる。だが、逆に考えると、これほど標準英語に似ている表現ならば、わざわざ島の言語で書く必要もないと言えよう。島民は全員標準英語の読み書きができるし、仮に英語で書かれた看板が分からない島民がいても、この看板の意味は「島へようこそ」ということだから、メッセージの対象はどうせ島民ではない。結局、ノーフォーク語が選択されたのは「コ

図4は言語景観の良い例である。太平洋のノーフォーク島の空港にある、到着するお客さんを歓迎するこの看板は標準英語と地元のノーフォーク語の両方で書かれている。ノーフォーク語とは二〇〇年前にタヒチ語話者と英語母語話者との接触によって形成された接触言語である。クレオールと呼ぶべきか、準クレオール (pidgin) と呼ぶべきか、隠語 (cant) と呼ぶべきか、研究者の間でその分類に関する論争が続いている (Larcock 1986) が、(一)で重要なのは、ノーフォーク語が、英語のような権力をもった国家語と違って、「地域言語」だという事実である。以下で取り上げる奄美大島のことばや他の琉球系統の言語体系は「方言」と呼ぶべきか、「言語」と呼ぶべきかという政治めいた議論が繰り返されているが、本論で重要なのは、奄美のことばが(標準)日本語のような国家語と違って権力を持っていることばではない。「地域言語」だという事実である。

ノーフォーク島の言語が空港の看板で使われていること、つまり言語景観に現れていることは、重要な意味を持っている。ノーフォーク島民は自分たちの島を自治権の強い独立国だと思っているのに対し、オーストラリア中央政府はオーストラリアの一部だと主張している。ノーフォークはオーストラリアの切手を認めずに独自の物を発行している。一方、お金は作っておらず、豪ドルを通貨としている。ノーフォーク島民は外国に出るとき、オーストラリアのパスポートのみ持つ。しかし、本土の人は島民と同じパスポートを持っているにも関わらず、島を訪れるときに日本人やアメリカ人と同様、パスポートを見せて「入国」手続きをしなければならない。

図4にある看板の表面的な(文字通りの)意味は「ノーフォーク島へようこそ」であるが、実際はこの歓迎ぶりとは正反対の役割を果たしているのである。島を訪れる客のほとんどは(日本人やアメリカ人のような外国人ではなく)オーストラリア本土の人である。看板では標準英語も使われているが、下に書いてあり、字体も小さい。上にあるのは地域言語であり、綴りを見れば明らかに英語と違う。看板の潜在的なメッセージは「おい！本土のやつら。勘違いする

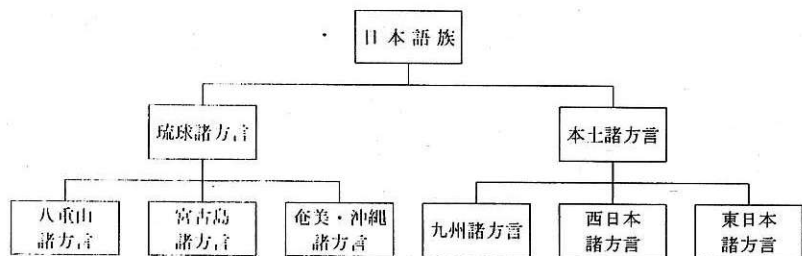


図7 日本語の諸方言の中の奄美語の位置づけ

何らかの形で読み手の空間認知を左右する物である。社会言語学や方言学では原則として話しことばを対象にしているの、言語景観を研究対象にするのは比較的新しい発想である。Backhaus (2007) は東京の言語景観を分析した。また Inoue (2005) は東京における多言語表示を取り上げた。

本論では、奄美の言語景観論の目を地域言語に向けて、「目に付く方言」の実態を探

コミュニケーションを円滑にする」ためではなく、むしろ、「コミュニケーションの妨げになる恐れがあるにも関わらず」と言えよう。

図3では、漢字で表記された英語の道路名を見た。しかし、これは中国から来た観光客が読めるように、という目的で設置されたわけではなさそうである。オーストラリアを訪れる中国人は、漢字表記がないと道路の名前が読めないほどローマ字の読み能力の低い人はいない。これはむしろ、言語景観づくりが目的なのであろう。本来、言語は意志を伝えるために使われる手段なのだが、プリズベインのチャイナタウンやノーフォーク島のこれらの例では、メッセージの内容よりも、そのメッセージを伝えるために採用された言語形式が重要なのだろう。

三 奄美とその言語変種

本論で取り上げる写真は奄美大島で撮ったものである(図6)。



図6 奄美大島とその周辺地域との位置関係を示す地図

その島で使われてきた言語は琉球語の一変種であり、琉球語もまた日本語族の一変種である。図7は現在、一般に認められている方言区画である。奄美大島は(沖縄本島やその周辺の離島と一緒に)北琉球方言に属する(中本一九八二)。伝統方言の言語体系や分布を記述した研究がかなり進んでいる(長田・須山一九七七・一九八〇、寺師一九八一、寺師一九八五、柴田一九八四、平山一九八四)が、その社会言語学的な研究も非常に興味のあるテーマである(倉田一九八七、木部一

九九五、真田二〇〇六、町二〇〇四、大阪大学二〇〇六、水谷・斉藤二〇〇六、平野二〇〇六)。

奄美のデータ分析に入る前に、ここで、言語景観の定義をもう少し具体的に考えよう。

言語景観は

- ・ 文字言語(看板や店に並ぶ商品のラベルなど)であり、音声言語(その商品のためのラジオCMや電車内のアナウンスなど)ではない。つまり、言語景観は視覚的な情報であり、聴覚的な情報ではない。
- ・ 公的な場に見られる文字言語(店舗のショーウィンドーにある看板)であり、私的なコミュニケーション(個人間で交わされる手紙や電子メール)ではない。
- ・ 不特定多数の読み手に発せられる物(商店街のポスター)であり、特定の個人宛てに書かれた物(自宅のドアにテープで張られた言付け)ではない。
- ・ 自然に、受動的に視野に入る物(駅売店の雑誌の見出しに使われている語句)であり、意図的に読まなければならない物(その雑誌の中の記事)ではない。

なお、上記の条件に合う物はみな言語景観と呼べるだろうが、本論で興味があるのは、何らかの形で読み手の空間認知を左右する物である。社会言語学や方言学では原則として話しことばを対象にしているの、言語景観を研究対象にするのは比較的新しい発想である。Backhaus (2007) は東京の言語景観を分析した。また Inoue (2005) は東京における多言語表示を取り上げた。

本論では、奄美の言語景観論の目を地域言語に向けて、「目に付く方言」の実態を探

りたい。具体的には奄美でどのような言語景観が形成されているかを、それと関わっているいくつかの言語学的要因や社会言語学的要因から考察する。データとして扱うのは、奄美大島の看板類（公のものの標識、広告、解説板など）に使われる地域言語の単語や語句である。筆者が四回にわたり奄美大島を訪れたときに島ことばが含まれている写真を一七八枚撮っている。これらに含まれていた延べ数三四五個の奄美ことばをデータベース化している。写真に収めたのは、博物館展示の解説板、公園内の樹木の名称札、スーパーに並ぶ特産物の表示、道端の立て看板、市営バスの広告、飲食店の手書きのメニューなどである。

四 標準日本語訳の有無

ここで、言語景観を考えるとときに役立ついくつかの社会言語学的要因を検討する。

ノーフォークや奄美のような島は言語データを収集するには都合である。島は普通その「出入り口」（上陸点）が限られているから、数少ない看板は多くの訪問者の目に付く。その分、一枚一枚の看板の影響力が大きくなる。奄美空港で観光客を迎えるのは、「ロードウ イモジャッカー Welcome to Amami」という看板である（図8）。出発のときに、その裏側の「また いもりんしょうれ奄美へ Have a Nice Day」が目に入る。これらには地元



図8 イモジャッカー(上)
イモリンショウレ(下)

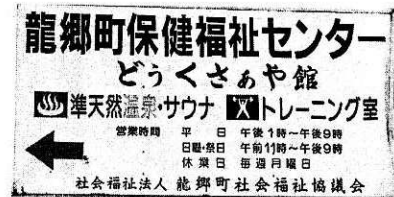


図9 ドウクサアヤ



図10 うがしなっ?
うがしだりよっと!

言語以外の翻訳が付いている。興味深いことに、それは「日本語訳」ではなく、英語訳となっている。方言景観の看板を考えるとき、このように訳語が付いているか否かが一つの興味深い特徴であり、分析要因でもある。現状を見ればこのように英語訳が付いているものは少ないので、結局、標準日本語が併記されているかどうかという問題になる。

奄美大島の龍郷町の保健福祉センターの看板に「どうくさあや館」と書かれている（図9）。予想される読み手は地元の人（特に年寄りの）人であり、訳（ドウクサアヤは「元氣」の意味）

が付いていない。図10は郵便局にあった郵貯を薦めるポスター。キャンペーンの詳細を聞いた老夫婦が嬉しそうに「うがしなっ?」と驚くと、郵便局員が「うがしだりよっと!」と答えている。その標準日本語訳として「本当に?」「本当です!」が併記されている。

五 訳の順番

図11で見るのは店の紙の買い物袋である。これを言語景観として捉えられるのは、こうした袋をもらった人々は、公な場所で持ち歩くからである。つまり、こうした買い物袋は商店街で見る「動く言語景観」の要素となる。街ゆく人々のTシャツに書かれた文字も同様である。袋には奄美ことばの「いもりれ」と日本語の「いらっしやいませ」の



図12 ソーラ、ソラ (サワラ)

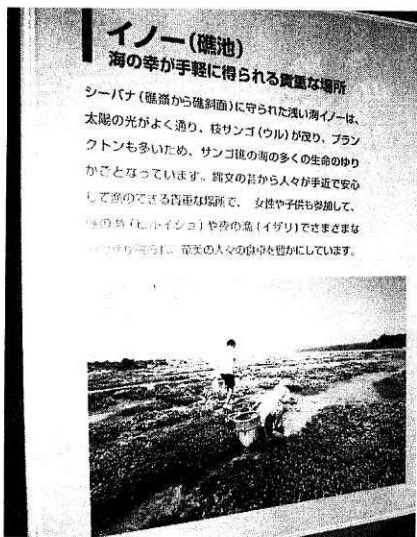


図13 イノー (磯池)

て重要な自然現象であり、社会活動と深く関わっている概念でもある。写真にも、イノーという自然現象だけではなく、それが人間社会にとってどう利用されているかということが写されている。

これらの言語景観の例から（あるいはここで取り上げられなかった多くの写真から）次のように一般化できよう。

- ・ 地域言語が先にきたり、目立つ形で書かれている場合、それが「本当の言い方」であり、標準語があくまでもその訳となつていく。
- ・ 逆に、標準語が先にきたり、より目立つ形で書かれているとき、地域言語の言い方は「追加情報」として紹介されていく。



図11 いもーれ (いらっしやいませ)

両方が書いてあるが、二つは同等ではない。標準語の方は(1)小さくて薄い字で、(2)地域言語より下で、(3)括弧の中に入っている。つまり、地域言語の方がメインで、標準語はあくまでも二次的(補助的)である。

この順番が重要で、しかも象徴的である。図12に見るのは、博物館にあつた魚の解説板である。見出しは「サワラの突き漁」と標準語になっている。解説で「奄美ではカマスサワラのことを「ソーラ」もしくは「ソラ」と呼んでいます」と書いてある。解説板の目的はある魚に関する情報を伝えることにある。魚の

「本当の」名は「サワラ」であり、地域の呼び名はその魚に関する一情報項目として挙げられている二次的な情報である。興味深いことに、博物館の学芸員がこれを作成したときに、地域言語を入れたのではなく、わざわざその地域言語の中の詳細な言語変異(バリエーション)まで挙げているのである。

図13では、図12と逆の順番が見られる。ここでは、地域言語の「イノー」が先にきて、標準語の「磯池」がこの訳(この例では「訳語」というよりも「説明」と言った方が適切であろう)として後に付けられている。よって、読み手は「方言は主であり、標準語が副である」という印象を受ける。

伝わってくるのは、「イノー」が本当の名称だが、地域言語が分からない人のために、説明を追加している、というものである。この地域言語では、イノーは一般に知られている単語で、伝統方言が話せない若年層話者でもこの単語を使っている。と同時に、「イノー」は「磯池」に置き換えてしまうわけにいかないほど、この地域社会にとつ

グII奄美店長」と書いてある。意図されている受け手(読み手)も「観光客の皆様」と明記されている。想定される読み手は地元人ではなく他地域から来た人である。にも関わらず、出だしは「いもーれ」という地域言語になっている。

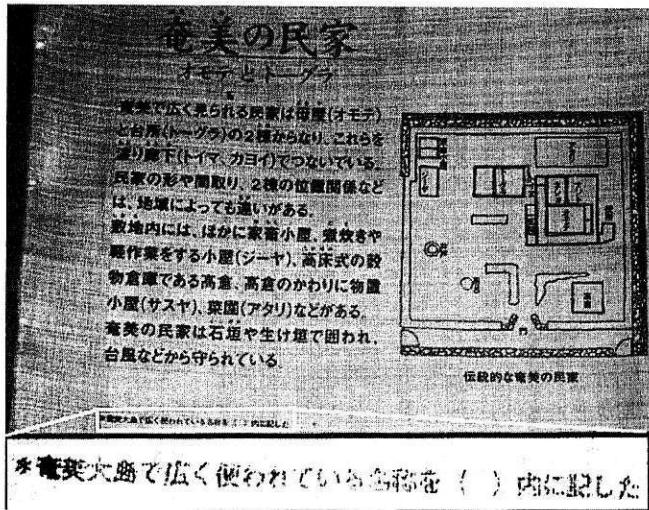


図15 奄美の民家 オモテとトーグラ

板で説明しようとしているのは奄美の民家の造りであり、奄美方言におけるそれらの名称は二次的な情報」という印象を受けかねない。しかし、この展示のタイトルを考えると「奄美の民家 オモテとトーグラ」と明記してあるので、そこだけを考えて、展示の目的は「奄美方言で言うオモテやトーグラを説明することであって、それらを説明するために、標準語、絵、説明文などが使われている」という印象を受ける。

六 受け手・送り手

社会言語学では「だれが話し手になっているか」や、「誰が聞き手になっているか」というような課題が重要である。言語景観の社会言語学的分析も同様である。図16に見られるのは、奄美大島の大手雑貨店の入り口にあった丁寧な筆で書かれた立て看板である。送り手を推測する必要はなく、はっきりと「ピツ

いる印象を受ける。

図13にシーバナという島ことばが出てくるが、これをいわば「本場の用語」として先に登場させ、その後で標準語訳(説明)がつけられている。「始めに方言ありき」といった感じである。

なお、標準日本語と奄美方言が両方併記されている場合に、どちらがメインでどちらが補助的かは判断しにくいと

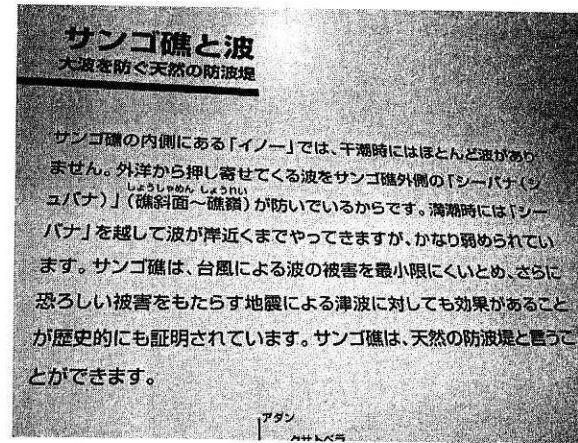


図14 シーバナ

奄美方言が出ている。イノは図9のドゥクサアヤのようにまったく訳なしで出ているわけではないが、図13の「イノ(礁池)」のように明確に訳が付いているというわけでもない。「イノ」の訳ではなく、説明が付いているのである。厳密に言えば、標準語と奄美方言との順番は「サンゴ礁の内側」が先で、「イノ」が後である。しかし、「イノ」が明らかにメインで取り上げられているものであり、標準語はそれを補助しているのである。

奄美民家の各部分の解説である図15を見ても、「主」と「副」の情報を決めるのが難しいことが分かる。まずタイトルと説明文を分けて考えると、説明文では、母屋、台所、渡り廊下といった部分が(標準日本語の名称で)紹介されている。それぞれの後ろに、補助的な情報として付け加えられているように、「オモテ、トーグラ、トイマ・カヨイ」という奄美方言の名称が付いている。ここだけを見ると、「解説

このように送り手と（予想される）受け手が明記されている看板は少ないが、多くの場合にこの社会言語学的情報を推測することが可能である。

図13は博物館の展示解説板だから、送り手は博物館の学芸員で、読み手はよそから来た観光客、または自分の文化

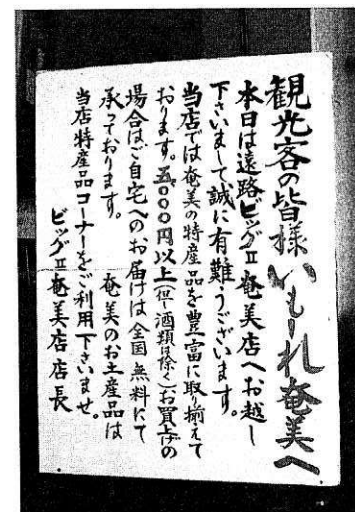


図16 奄美店店長から観光客宛に書かれた立て看板

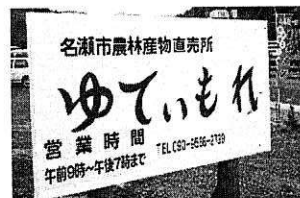


図18 ユティモレ



図17 どうくさ療つ党

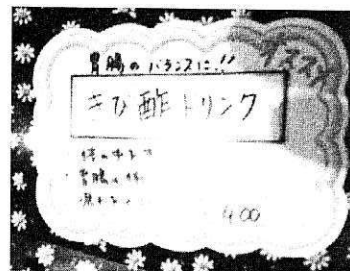


図19 きび酢



図20 きよらクリニック

ゾチックな雰囲気をかもしだすために観光客向けに作られているというわけではない。図10の郵便局の案内は地元住民向けのものである。図17の看板「どうくさ療つ党」では図9で使われている言い方が出ている。これは郵便局の案内と同様、観光客とほとんど無関係である。

図18のユティモレ（寄ってらっしゃい）も読み手は観光客というよりも島の人だと思われるが、図16の店長が作った臨時的な物と違って、これは公の機関という送り手によって設置されたものであり、常時表示されるものである。そこで「永久性」という新たな分析要因が浮かんでくる。

臨時性を感じさせるのは、喫茶店にあった手書きのメニューである（図19）。これに比べて図20の「きよらクリニック」は業者によって製造された看板であり、病院の登録名称でもあるので、永久性が高いと言えよう。

がまだ分かっていない地元の生徒などであると考えることができる。奄美には多くの観光客が来るので、図11から図16はいずれも島外者を対象に作られたと見なすことができる。奄美は地域言語をこのように積極的に「観光資源」として活用している。標準日本語を使えば同じメッセージを伝えることができるが、それ以上の雰囲気は伝わらない。

しかし、だからと言って奄美の方言看板は全部、エキ

七 言語レベル(文法) ↑ ↓ 単語

以上で見てきた社会言語学的な要因と違って、言語内的な要因による分類の考察も可能である。例えば、「地域特有な現象を表す語彙」対「普遍的な概念を表す語彙」、あるいは「文法事象」対「個別単語」などである。

図8のイモシヤッカーや図9のドウクサアヤは標準日本語で言い表し切れないニュアンスが含まれていると主張する人もいるかもしれないが、結局のところ簡単に日本語訳されてしまう。つまり、日本語にもある普遍的な概念・事物であるとと言える。一方、地域文化の特有な物や現象で、簡単に日本語に訳せない単語もある。図13のイノーや図19のキビスはこれに当たる。

また、言語事象の面から見れば、トーグラやシーバナは個別単語であり、受け手はこれらを丸暗記さえすれば、自分でも使用することも考えられる。一方、イモシヤッカーやユティモレは動詞であり、奄美語の文法規則(活用法)に関する知識がなければ観光客がこれらの語を自らの会話で使うことは困難である。

図21は「なつかしやー」(懐かしい)や「電話してみろー」(してみよう)という形容詞、動詞の活用形が含まれている広告チラシである。図22は観光地の立て看板で接続詞の「とう」をわざわざ方言の形で取り入れている。このような文法事象は方言辞典を見ただけでは意味が分からない。

八 表記法

図23の「Kyora KAN きよら館」や図24「THIDA MOON ディダムーン」の表記法に注目してみよう。地域言語をローマ字で書き表すことで、標準日本語との距離をおき、別の言語としての雰囲気を出している。

しかし、表記が関わっているのはこうした言語イメージ的な側面だけではない。標準日本語と奄美方言との言語的な違いも表記に現れている。奄美の伝統言語は(標準)日本語と音韻体系が異なるので、カタカナ表記で表すのに工夫が必要である。これは例えば、「ティル」や「ドウクサ」、「フェカブリヤ」、「クワン」、「ウイダーナ」のような表



図21 文法的情報を含む広告



図22 機能形態素「とう」を含む看板



図23 Kyora KAN



図24 THIDA MOON

記の場合は、表そうとしている音声（音価）がほぼ明確である。「ユズイル」の場合も、標準日本語にはない音とはいえ、表している音は想像がつく。言い換えれば、これの発音と（例えば）テル、ツクサやドクサ、フカブリヤ、カシ、ユジルなどの発音がどう異なるかは容易に想像できる。これらが表そうとしているのは、標準日本語に存在しない音韻配列である。つまり、標準語にも「ㄷ」という子音と「ㄷ」という母音が存在するが、標準語では「ㄷ」という組み合わせは（普通は）ない。奄美語には「ㄷ」という組み合わせが音韻論的にあり得る音韻配列である。しかし、「フバシラムイ」や「ヌイザクラ」、「ケインムン」、「チンギイ」、「ムチイギ」、「シイバナ」の場合は、実際にどういふ発音を書き表そうとしているかは、奄美語を知られない人にとっては想像不可能であろう。奄美語の母音素が六つであり、標準日本語にない母音が存在するのである（柴田一九八四：二七二頁）。この「ㄷ」と「ㄷ」のように表記している、ケイは「ㄷ」（長田表記：「ㄷ」、「ケキ」）を表しているが、いずれにしても、標準語にない音だが、妥協せずにそれを正確に、方言に忠実に表記しようという言語意識を窺い知ることができよう。

図25は「ウワントネ」という民具（豚の飼箱）の名称を仮名で書き表そうしている博物館の展示物表示である。豚は「Pwan」と発音され、標準日本語にはない語頭の声門閉鎖音で始まっている。「ウワン」の文字の組み合わせを見た内地の話者がいきなりこの音を正確に発音できるようになるとは思えないが、「wan」（私）との区別を何とか保とうとしている様子が窺える。

比較のために図26を見よう。これは方言看板ではなく、インターネットに載っていた記述である。図25と同じ「豚」だが、ここでそれを「ワン」と表記しているのが興味深い。この「ウワン」と

ウワントネ（豚の飼箱） 名瀬市

図25 ウワントネ

みしよーれ奄美



メニュー

奄美の島料理	
名物・鶏飯	1,300円
ミニ鶏飯	680円
油ぞうめん	680円
ワンフネヤセ(豚骨と野菜の煮付け)	880円

図26 ワンフネヤセ

「ワン」との違いはどう捉えれば良いだろうか。それぞれは、言語的バリエーションを積極的に反映しようとしているのではなく、ただ単に語頭の声門閉鎖音（[ʷan]）を仮名で忠実に表記するのが難しいため適当に「ワン」と表記しただけのことであろう。細かいことを言えば、奄美には「Pwan」という発音と「wan」という発音の両方があるが、これは島内のバリエーションというよりは、若い島民が伝統方言にある二つの発音の使い分けができなくなっていることによる問題である。豚のことを「ウワン」

ではなくて「ワン」と発音するのは年配者（あるいは正確な発音にこだわる若い人）から批難される。図12で見た「ソラ」と「ソーラ」の二つの表記は奄美社会に見られる重要な変異（バリエーション）を積極的に紹介しようとしたものである。しかし、図26は積極的に若者の発音を表そうとしているというより「ウワン」という分かりづらい表記を避けているだけであろう。よって、この二つの違いを表記の違いと見なすことができよう。

九 方言内の変異

以上見てきた表記の不統一は、「同一の言語現象をどのように文字で表せば良いか」という問題に過ぎないが、実

前節の表記のゆれ（表記法が特に定められていない）状況とは違う。ここで見られるのは積極的に、意図的に言語的変異を取り上げているものである。前節では、老年層・若年層の違いが見られるが、表記の違いはその違いを意図的に



図31 わきや絵

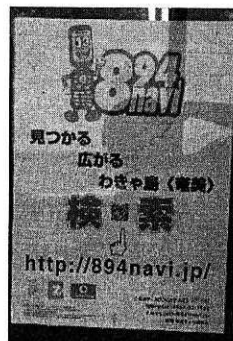


図30 わきや島



図33 わきや集落

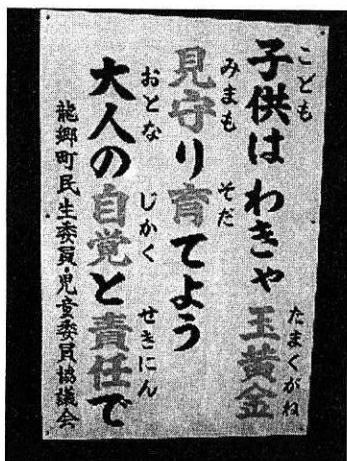


図32 わきや玉黄金



図34 わきや島



図28 クックルー、クッカール



図27 スティツ、シティチ



図29 「方言名は、奄美大島で広く使われていることばを用いた」

際の言語変異が方言看板に現れている場合もある。奄美方言の中にもバリエーションがあるという重要な事実を観光客に印象付けるものであろう。奄美大島の中、または奄美群島（喜界島、沖永良部島、徳之島、与論島など）において、地理的変異が見られるが、これは例えば「スティツ、シティチ」（ツテツ）（図27）や「クックルー、クッカール」（アカショウビン）（図28）などの例に見られる。

こうした細かい地域差への配慮はこれまで見てきた図12の『ソーラ』もしくは『ソラ』あるいは図14の「シーバナ、シユバナ」にも現れていた。

一方、こうしたバリエーションを避けている看板も見られる。先に見た奄美パークの展示物解説板（図15）には、方言語形として使用した単語は「*奄美大島で広く使われている名称を（）内に記した」という断り書きが入っていた。奄美博物館の「漁の道具」の展示にも同じように、奄美群島内の言語変異を尊重した配慮が見られる（図29）。

図27や図28の写真に見られるバリエーションは、



図35 ワンキヤガヤランバ……

反映しているわけではない、と述べた。しかし、そうした方言看板もある。

図30の携帯電話ナビの広告では「見つかる、広がる、わきや島（奄美）」と書かれている。図31は小学校の柵に飾られていた絵を「わきや絵」と表現している。図32には「子供はわきや玉黄金見守り育てよう大人の自覚と責任で」が記されている。図33には「愛と平和を大切に いもーれわきや集落へ どうくうさが宝」と書かれている。図34は「わきや島や青い海、島唄、テイダがマンデイ」となっている。それぞれ

「私たちの島」、「私たちの絵」、「私たちの宝物」、「私たちの集落」、「私たちの島」という意味である。

さて、これらで使われている「ワキヤ」を図35の「ワンキヤ」と比べよう。図35は名瀬（現在、合併によって奄美市の一部となっている）にある奄美高校の文化祭のポスターである。名瀬は奄美大島の中部に当たる。図31も旧名瀬市である。図32と図33は北部に当たる龍郷町の写真であり、図34は南部の瀬戸内町である。「ワキヤ」と「ワンキヤ」は地域的なバリエーションではない。

むしろ、「ワキヤ」は（奄美大島の各地区の）伝統方言であるのに対し、「ワンキヤ」は二〇世紀半ばに出てきた新しい言い方である。そして、図30を作った「メッセージの送り手」は企業だが、図31は名瀬市立朝日小学校、図32は龍郷町民生委員・児童委員協議会、図33は龍郷町嘉渡集落、図34は瀬戸内町である。つまり、図35の「ワンキヤ」を使っているのは（絵から判断すれば）ロック好きの高校生であるのに対し、（図30を除いて）ほかの看板を作ったのは「正し



図36 イモリンシヨール



図37 ウガミシヨール



図38 ウガミンシヨール

い方言」にこだわりそうな行政である。

これらの違いは単なる表記のゆれ云々ではなく、行政が「ちゃんとした」方言を選んだのに対し、若者は自分たちが実際に使っていることばを選んでいるものではないだろうか。

十 方言の定型化

訪問者として沖縄を訪れると、方言の定型化による商品化が起きつつあるという印象を受ける。どこへ行っても、旅行者を迎えてくれるのは「メンソーレ」ということばである。これは首里方言の挨拶ことばであるが、本来これと異なる表現が使われていた離島などにも、この定型化された言い方が広がっている。しかし、奄美では、本

来のバリエーションが保たれている印象を受ける。

これは先に見た地域差にも感じられるが、それ以外の表現や活用形のバリエーションにも見られる。メンソーレに匹敵する「イモーレ」（図11、図16）は確かに奄美大島で頻繁に目に付くが、これ以外にも図8（上）に見たイモシャッカーもある。また図36のIMORINSYREは分かりにくい、お

そらく図8(下)に見たイモリンシヨウレと同じであろう(ローマ字表記のIMORINSYOREから“O”が抜け落ちていた間違
いだと思われる)。すなわち、同一の動詞からなる二つの活用形が使われている。

さらに、挨拶ことばに、別の表現が使われている看板もあった。図37の「うがみしよーら」は別の動詞からなる表
現である。この変異形である「うがみんしよーら」は図38に見られる。

図37のウガミシヨールと図38のウガミンシヨールとの違いは確かに前節で見た「言語変異」である。しかし、歓迎
の挨拶としてイモレを使うか、イモリンシヨールやイモシヤッカーを使うか、さらに、ウガミシヨール(ウガミン
シヨール)を選ぶかは、表現の選択としてのバリエーションである。「メンソーレ」の使用が圧倒的に多くて、歓迎の
挨拶ことばが一つの表現に一本化されている沖繩との差異を感じる。

十一 アイデンティティ

先に取り上げた学園祭のポスターに戻ろう(図35)。名瀬の電信柱に貼られたこのポスターは、奄美高校の文化祭
を宣伝するもので、送り手はもちろん地元若者と思われるが、内容や貼られている場所、描かれているデザインな
どからすれば、受け手(読み手)も同じ島の若者だと思われる。シルエットとなったロックミュージシャンがギター
を持つてかっこいいポーズをとっている。「わんきやがやらんば、だれがやる！ やるつきやないっしょ！」とい
う文句は、内容からも、そして使用される言語変種(全国共通語ではなく、若い島民の日常語)からも地元意識の強さを
感じ取るができる。町(二〇〇四)が指摘するように、奄美の若者は地域色のあることばに対して好意的に思ってお
り、彼らの間に新しい「奄美普通語」が誕生しつつあるようだ。真田(二〇〇六)、大阪大学(二〇〇六)でも、若者

の方言に対する愛着、好意的な意識が浮き彫りになっている。

十二 言語景観を形成する要因

以上の要因を表1にまとめる。これ以外にも、看板が設置されている場
所(博物館内、バスの外壁、店の看板、商品のラベル表示、公園内の標識)や表
記(平仮名、カタカナ、ローマ字、漢字、漢字に振り仮名、ローマ字と日本語の文
字の併記)など、有意義な要因が他にも考えられる。

井上史雄(二〇〇〇、二〇〇一)は、地域方言など少数派言語の使用を、

表1 いくつかの社会言語学的要因

日本語訳	なし	あり
地域語の順位	あと	さき
推定読み手	島民	観光客
送り手	個人	公的
永久性	臨時	常時
作成法	手書き	印刷
言語単位	文法事項	個別単語
意味	日常語彙	文化語彙
表記法	伝統方言音韻体系重視	標準日本語に合わせる
⋮	⋮	⋮

その金銭的な価値(お土産の販売など)と結びつけて考える必要があると主張している。方言が奄美地域の言語景観で
これほど大きな役割を果たしていることは、地元の人が方言使用にそれなりの価値を見出しているからだと思われる。
また、真田信治(一九九九)は方言使用をスタイルシフトの現象として捉えているが、今回のような公な場における
文字言語としての方言の使用も、明らかに意識的な言語変種選択であるので、話しことばにおけるスタイルシフトと
並行して書きことばにおけるスタイルシフトの実態を検討することが必要であろう。また、言語景観の中での地域言
語の使用を、文化的観光資源(ロング二〇〇三、可知二〇〇四)という観点から分析するのも有効であろう。

言語景観とは、人々が暮らしている生活環境の中の視覚言語によって形成されている部分である。その言語のあり
方や使い方によって、生活環境が大きく変わるのである。日本各地で方言が話されているが、優勢方言とされている
関西方言ですら、道行く人の目に映る方言は比較的少ないと言えよう。今回対象地域とした奄美大島の言語景観では、

地域言語がどうしてこれほど大きな役割を果たしているのか、さらなる検証が必要であるが、今回の試験的研究で次のことが言える。

- ・奄美大島では、公の場における文字言語としての方言の使用は多い。
- ・したがって、奄美の言語景観全体における方言の役割が大きいと言える。
- ・この方言使用は「雰囲気作り」のものから、地元文化を紹介する教育的なものまで多岐の機能を果たしている。
- ・言語景観に現れる地域言語には、伝統方言のみならず、若者が日常的に使用している新しい方言も含まれている。
- ・観光客などの外部者に対して奄美の地域言語を積極的に紹介しよう、味わわせようという姿勢、意識が感じられる。

・また、伝統方言（特に見当たらなくなっている民具や触れる機会がなくなった現象などの名称など）を知らない地元の子供たちにも教育する意図があるように思われる。

謝辞

現地調査を一緒に行なった新井正人氏、および調査に協力して下さった次の方々々に御礼申し上げます（敬称略）。

喜入智章、重田茂之、高梨修、辻本純子、辺木憲一、辺木則夫、花井恒三、久伸博、藤原俊一、麓憲吾、前田聡、松原昇司、森本真一郎

注

(1) 調査時期は次の通りである。第一回目は、二〇〇四年一月二八日～二〇〇四年一月六日（ロング代表の萌芽研究「言語接触によって誕生した新生言語体系の形成過程を解明する調査研究―南大東島社会における八丈語と琉球諸語の共生と混合化―」

#一六六五二〇三三）。第二回目は、二〇〇五年四月二九日～二〇〇五年五月七日。第三回目は、二〇〇六年四月二八日～二〇〇六年五月五日。第四回目は、二〇〇六年八月一日～二〇〇六年八月一九日（木部暢子研究代表者の基礎研究（B一般）「日本語方言イントネーションのデータベース構築と音調記述に関する研究」#一八三二〇〇七三）。

参考文献

- Bachhaus, Peter. 2007. *Signs of Multilingualism in Tokyo - A Linguistic Landscape Approach*. Universität Duisberg-Essen, PhD Dissertation.
- Inoue, Fumio. 2005. *Economic aspects of multilingual signs in Japan*. *International Journal of the Sociology of Language*. 175-176:157-177.
- Laycock, Donald C. 1989. *The Status of Pitecairn-Norfolk Creole, Dialect or Cant? Status and function of languages and language varieties*, ed. Ulrich Ammon, 608-629. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 井上史雄（二〇〇〇）『日本語の値段』大修館書店
- 井上史雄（二〇〇二）『日本語は生き残れるか 経済言語学の視点から』P11P新書
- 大阪大学大学院文学研究科真田研究室（二〇〇六）『奄美大島における言語意識調査報告』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 逐次刊行物
- 長田須磨・須山名保子（一九七七・一九八〇）『奄美方言分類辞典 上・下』笠間書院
- 可知直毅編（二〇〇四）『小笠原の人文と自然―人と自然の共生をめざして―』
- 木部暢子（一九九五）『方言から』『からいも普通語』『言語』二四巻二号 六六一―七七頁
- 木部暢子編（一九九七）『方言耳寄り情報』屋久島方言紀行『九州方言研究会会報』六二―七三頁
- 木部暢子編（一九九八）『方言耳寄り情報』方言看板五題『九州方言研究会会報』三三―四三頁
- 倉田則夫（一九八七）『トン普通語処方箋―シマの標準語をすっきりさせる方法』私家版
- 郡史郎編（一九九七）『大阪府のことば』明治書院
- 真田信治（一九九九）『方言の意識化と方言の実体』『ことばの二十世紀』ドメス出版

- 真田信治 (二〇〇六) 『薩南諸島におけるネオ方言 (中間方言) の実態調査 「奄美」 研究成果報告書』
 柴田武編 (一九八四) 『奄美大島のことば―分布から歴史へ―』 秋山書店
- 柴田武 (一九八八) 『生きている日本語 方言の探索』 講談社
- 杉村孝夫 (一九九六) 『方言を取り入れた看板』 『九州方言研究会会報』 四 一一三頁
- 杉村孝夫 (二〇〇一) 『方言耳寄り情報』 『九州方言研究会会報』 三 三三四頁
- 杉村孝夫 (二〇〇二) 『方言耳寄り情報』 『うもより喜界島へ』 『九州方言研究会会報』 二四 二二四頁
- 杉村孝夫 (二〇〇三) 『写真に写った方言―鹿児島篇』 『九州方言研究会会報』 一八 二二四頁
- 杉村孝夫編 (二〇〇四) 『写真に写った方言―博多篇』 『九州方言研究会会報』 一九 三二四頁
- 杉村孝夫編 (二〇〇四) 『写真に写った方言』 『九州方言研究会会報』 二〇 二二四頁
- 寺師忠夫 (一九八二) 『奄美方言の研究』 私家版
- 寺師忠夫 (一九八五) 『奄美方言、その音韻と文法』 根元書房
- 中本正智 (一九八二) 『図説琉球語辞典』 金鶏社
- 平野涼子 (二〇〇六) 『沖永良部島からの移住者の言語意識と言語使用―神戸および沖永良部での調査より』 『日本方言研究会第八回研究発表会発表原稿集』
- 平山輝男 (一九八四) 『奄美地方方言基礎語彙の研究』 角川書店
- 町博光 (二〇〇四) 『奄美諸島方言の世代間変容―場面設定の対話資料による』 『社会言語科学』 七巻一号 七五―八三頁
- 水谷美保・斉藤美穂 (二〇〇六) 『とりたて詞「ナンカ」の用法の拡張―奄美における標準語と方言の接触』 『日本方言研究会第八回研究発表会発表原稿集』
- ロング、ダニエル (二〇〇三) 『小笠原諸島における文化的エコツーリズムの課題』 『小笠原研究年報』 二七 一〇五―一四頁